

# 「授業」と「研究」はいかに関連しうるのか

## —ある大学教員のインタビュー調査から—

○中居 舞子

(広島大学大学院・院生)

境 愛一郎

(広島大学大学院・院生)

### 1. 問題の背景

一般的に、「授業」と「研究」は異なる行為として認識されている。「授業」は、形態は多様であるにせよ「(受講生を)教えること」であり、「研究」は、物事について調べ、分析／考察をして「新たな知見を生み出すこと」である。そのため、大学教員を目指す博士課程学生にとっては当然、研究をする力も学生を教える力も、同様に重要である。

だが近年、大学がユニバーサル化する中で、研究よりも教育<sup>2</sup>に力を入れることが望まれている状況がある。そのため、授業準備などが自身の研究の足かせとなることも少なくなっている。そうであるならば、授業や授業のための教材研究と学術研究が乖離していると考えられるよりも、結びついていると考えるほうが生産的であろう。

もちろん、授業者は担当する科目に関連する研究業績を有しているはずなので、自身の研究を授業に応用することは難しいことではないだろう。ただし、今回発表者が使用している「授業」とは、大学における教職科目であることに留意せねばならない。その理由として以下の二点が挙げられる。一点目は、担当する教職科目が、必ずしも自身が専門的に研究を重ねてきた内容ではないことである。二点目は、教職科目は教員免許制度に基づいて行われる授業であるため、必ず教えるべき内容が存在することである。小中学校の授業のように学習指導要領のない大学の授業では、教える内容や到達目標は教員の任意で決められる。だが教職科目は、教員免許を取得し、将来の学校教育を担う人材を育成するような学びを保障する必要がある。

とはいえ、大学の授業である以上、最先端の研究内容が扱われるべきであろう。このようなジレンマを抱えつつも、「授業」と「研究」に繋がりを見出すことはできるのだろうか。

そこで本報告では、実際に教職科目を担当している大学教員にインタビューをし、具体的な「授業」と「研究」の関連性について調査し、「授業」と「研究」の新たな結合の可能性を探ることを目的とする。

### 2. インタビューの概要

インタビューは、2013年1月21日(月)、広島大学教育学研究科内の研究室で行われた。対象となった大学教員は、広大教職P参加経験をもつ私立女子大学の男性教員Y先生である。Y先生は、小学校教員としての長いキャリアをもち、40代半ばではあるが大学教員と

---

<sup>2</sup> 本報告においては、とりわけ「授業」を指すこととする。

しては3年目である。専門は、教育方法学、授業研究（社会記号論的研究）である。

インタビュー調査に向けて、まずはY先生の授業を観察させていただいた。観察した授業は第13回目の講義。授業は、パワーポイントで流れを作り、そこに教科書の内容や映像を載せる形で行われた。一つの事柄を様々な角度から説明し、伝わる言葉を探しながら授業をしているのが印象的であった。また、授業中は発問をしても学生を指名せず、答えを出す前にヒントを与えたり、学生が活動するまで待ったりと、自発性を重視しているようであった。この様子に、報告者は小学校での授業を想起させられた。おそらくY先生の小学校教員としての経験が活かされているであろうことが予想された。

小学校の授業と大学の授業は一般的に性格が異なるものとして理解されていよう。しかしながら大学でも小学校でも、教壇に立って「授業をする」という意味では共通した部分も多いのではなかろうか。そこで、インタビューのはじめに、小学校と大学での授業の違いについて尋ねることにした。その後で、具体的な授業構想の方法や、授業と研究との関連についての話を伺った。

### 3. インタビューの分析

#### (1) 小学校の授業と大学の授業との連続性

インタビューは、提示した話題に対して自由に語ってもらうという形で進められた。

「大学の授業と小学校の授業で、同じところと違うところはどこですか」という質問に対して、Y先生の答えは、「内容の違いやレベルの高低はあるにしろ同じ」ということであった。ただし、Y先生は、大学の授業は「講義」は「講義」、「演習」は「演習」であることを主張した。その上で、「授業である」ための条件を語っている。

授業と（講義は）何が違うかという、相互作用があるかないかです。学生とか、学生同士とか、学生の中、自己とメタ自己みたいな、の相互作用、まあ「対話」ですよ。が、成り立つかどうか。それが成り立ってなかったら授業じゃないと思う。

そう考えると小学校の授業と同じものは何かって言ったら、教えたい、伝えたいこと、考えてほしいこと、確固としたものがある、どちらもある、なきやおかしい、これは同じ。

以上のように、授業の条件は、①教えたい内容があること、②相互作用が起こること、である。Y先生は、小学校でも大学でも、条件は同様であると考えている。報告者は当初、大学の授業には学習指導要領に定められているような到達目標がないため、ある程度自由に構想することができる、と前提していた。だが、授業の到達目標というものは、与えられていてもそうでなくても、結局は授業者が設定しなければならない。逆に小学校の授業においても、その授業の目標を定めるのは学習指導要領ではなく授業者であるといえる。

以上を踏まえれば、教職の授業においても、教員免許制度に基づいた内容を教えなければならないのだが、与えられた教材を解釈して到達目標を定めるのは授業者であることは明らかである。それは、「授業」としての共通の基盤なのであろう。

さらにY先生は、大学で「授業」を成り立たせるための可能性を模索している。これは彼の専門が教育方法学であることにも関係しているだろう。

方法は二つあると思ってる。大雑把に二つ。同じになるとすれば、(中略) 課題を出して演習型にするとか、教える - 学ぶシステムを組み替えてしまうという発想が一方にはある。講義じゃなくて、一方的に教員が語り学生が聞くというスタイルじゃなくて、グループワークとかガンガン入れて。仕組みを変えれば。(中略) ケースメソッドなんてそうかもしれない。彼らに考えさせる、彼らに語らせる。あるいはサンデル教授の白熱教室みたいな。ああいうふうに、「教える - 学ぶ」のスタイルを変えちゃうっていうのは、一方にはあるでしょうね。僕も一時期それをやろうとしたことはある。あるんだけど、百何十人、二百人を預けられちゃったら無理だよ。それで、もう一方を考えた。それは何かといたら、結局はグループにしたって何したって、話し合いさせて。させられた対話って意味がない。(中略) いい題材、教えたい題材があって、見せて、どう思う？って言ったときに、その学生・学習者の中で「自己内対話」が起これば関係ないわけでしょ、って思った。それがもう一方のスタイル。だから大雑把に二つあるって言ったときに、授業システムを変えちゃうか、そのままであればとことん見えにくい対話だけど、対話にこだわって、システム的な対話に走るか、一方で自己内対話を何人呼び起こせるかにかける。最近は後者をやるようにしている。

このように、Y先生の考える「授業」を成り立たせるための条件は、①講義形式でなく、グループワークなどを多くして学習者に自分で考えさせるような授業システムへの転換、②良い教材を使って学習者の中での「自己内対話」を起こすこと、である。②に関しては、何人の学習者の「自己内対話」を起こすことができるかという「賭け」になることを懸念しつつも、百人を超える受講生に対する授業では、②が必要だという。Y先生にとっては、講義形式でも演習形式でも「自己内対話」を起こすことができるかが重要な課題なのである。

では、「自己内対話」を起こすような授業を理想とする Y先生の授業は、どのような教材研究がなされ、どのように授業が構想されているのだろうか。

## (2) 授業と研究的方法的側面—教科書の扱い方に着目して—

次の話題として、授業を構想する際にどのような教科書を採択して、それをどのように自身の授業に位置づけるのか、ということ挙げた。この話題には、既に教科書が定められた教科書をどのように扱うのか、という問いも含まれよう。教科書を選択する権利は必ずしも授業者にあるとは限らないからである。以上のことも含めて話題を提示した。

それに対して Y先生はまず、他人の書いた教科書の使いにくさについて語る。

(もともとある教科書は) そのままでは使えない、だからどんな本でもそうなんですよ。結局あの本のこの部分とか引用しながら、僕らの論文と一緒にですよ。組み立てて一つの、15章の、14章かな？の話を作る、っていう作業を結局しなきゃだめなんだよ。どうしても使わなきゃいけない教科書は、あれ一冊なんで。前任者の教科書。あれ、もうだから読み込んで、シラバス作った。最初考えてたやつと替えて。1年目とも違うし、2年目とも違うし。これを最大限生かしつつ、自分のストーリーと、どこで折り合い付けれるか、って考えたのが今の授業です。

以上からも分かるとおおり、1年目、2年目と経験を重ねるごとに授業内容やスタンスは変化していく。Y先生も1年目の授業を振り返って、現在の授業との違いを語っている。

1年目にあった連中はかわいそうだったなあ。つまんなかったと思いますよ。こっちが、これはこういう意味だとか、いろいろ言っても、やっぱり言葉に、ロゴスもパトスもないみたいな。ああだめだあーと思ってやめた。だから本当に今、教科書全面使ってるんだけど、よく見ると本当に部分部分しか引用してない。(中略)教科書を道具として使えるようにならないと、とてもじゃないけど、大学で教科書なんて使えん、って思った。そうじゃなかったら、自分で書くしかない。

1年目のY先生の授業は、教科書に「乗る」形での授業であったといえる。経験を重ねるごとに、自身の授業構想に教科書をどのように「乗せる」のか、という考え方に変容していったのである。つまり、教科書が指定されているとしても、15回の授業を自身が構想できなければならない。既にある教科書のどの部分を使ってどのように授業を組み立てるのかを考える作業は、研究を構想して論文を書く作業と似た力かもしれない。

教職科目においては、教員免許制度上教えなければならない内容を、自身の授業構想のどこに位置づけるかということが課題となる。逆に、教職科目の内容のどこに自身の研究が位置づいているかを考えることも大切かもしれない。いずれにせよ、自身の研究のみならず、教職科目を教えるための教材研究も必要ではある。

以上の話の流れを踏まえて、直接Y先生に授業と研究の関連性について質問をしてみた。それに対してY先生は次のように答えた。

教科書との付き合い方ってことかあ。これは後でまた話すんだけど、研究の裾野の広げ方の問題と関係している。裾野っていう言い方を敢えてしますが。

とにかく教科書自体が、なんかねえ、教科書一冊あれば。哲学<sup>3</sup>もあるかなあ、各授業ごとに、たとえば「ミネルヴァ」とか「ぎょうせい」とか、教職関係のシリーズがあるじゃん、あれがあれば教えられるかって言ったら無理でしょ。あれを朗読したって無理だし、1年目なんてそれを読んだけど、読むだけだったら自分でできるから聞かないし。結局のところ、授業づくり自体がある種の研究活動なんですよ。

このように、授業と研究の関連性を「教科書との付き合い方」に見い出している。「14章を書く主要な引用文献がこのテキストと考えれば、(他人の書いたテキストでも)なんとかなる」というY先生の話からも窺えるように、教科書を授業の道具として使う発想が必要である。また、自分の論文のどこに、どの部分を引用するのか、という点は論文を書く作業と類似している。

以上に鑑みると、授業と研究は、その方法論において結びついているといえる。では、「授業内容」と「研究内容」はどのように結びつきうるのだろうか。

### (3) 授業と研究の内容的側面—その相互作用に着目して—

Y先生は、授業と研究の内容的な繋がりに関して、以下のように語った。

---

<sup>3</sup> 報告者の研究分野が教育哲学であることから、発せられた言葉である。

研究にドンピシャはまる授業って、最近特にそうですけど、僕の研究なんかもそうだけけど、ピンポイントでいくじゃないですか。(中略)例えば、モレンハウアー<sup>4</sup>の話を14回話しても授業にならないじゃん。同じように僕も社会記号論の話を14回は絶対無理、なんですけど。それやっても、意味こっちにもないし、学生にもないかもしれないですよ。最近やっと思ったのが、例えば教育方法論なり課程論の話をしていく中で、ちょいちょい14章立ての、まあ仕方ない、授業の中ために1本論文書きたいな感じですよ。その中にちょいちょい引っかかってくるんですよ。自分のことが。「これ社会記号論的に言うとね」、直接言うこともあれば、「これは言葉の選び方の問題だよ」、とか、ここでどういう言葉を選ぶかって問題だとか、社会記号論的な言い方なんだけど。そういう思考の装置として組み込むと、意外と語れることはあったりする。(中略)記号論の話ばかりになっちゃうんですよ結局、自分の研究って。

自身の研究とはそれほど関係のない教職科目でも、意外に活かせる部分がある。それは当然のことといえるかもしれない。しかしこの後、Y先生が「研究って深さもいるけど広さも要りますよね、その広さの部分はどう担保するのか」と語ったように、研究にとって大事なものは深さだけでなく広さである。自身のためにも、学生のためにもなる授業にするには、自身の研究の狭い範囲を深く掘り下げるだけでなく、授業に合わせて範囲を拡げることも重要なのである。

その広さの部分担保するためには、全体をズームアウトする視点を持って、研究の裾野を拡げる必要があるという。その時に、研究内容の中で教職科目に活かせる点が少しずつ見えてくるのである。

最近関心持っているのが生活指導なんですけど。生活指導は方法論の一部ではあるんだけど、授業づくりと相対的に距離がある。だけど生活指導の中で社会記号論って意外といけるって最近分かって。それは授業づくりの中で学生にこれどうやって説明しようかなってときに、まあ記号論が使えることが分かってきた。それで今、研究進めているところ。それはズームアウトするチャンスがないと分からない。

で、もっとも人は教えるときに考えるので。教えるときに14章立ての中で考えたときに、やっぱり一番使えるのは自分の専門。これが授業潜り抜けてもう一回深くなる。

このように、授業を構想する(その内容だけでなく、学生への説明の仕方を考えることなども含める)中で、研究を深めるチャンスが訪れることもある。それらはズームアウトするチャンスがないと分からないのである。

記号論の話だけしとくと、じゃあハリデっていう言語学者がいるんだけど、ハリデばかり読んでたら分かるのかって、どんどん授業づくり全体像からかけ離れていく。そうすると、全体っていうのをいつもズームアウトする視点がいるんですよ。ズーム

---

<sup>4</sup> モレンハウアー (Mollenhauer, K., 1928-1998) とは、ドイツの教育学者であり、報告者の研究内容と関連する人物である。

アウトして全体像を考えるっていうこと。裾野を広げるためにはね。その時に時々ちよいちよい根っこをはる。(中略) 社会記号論で言ったら、人はどんな時にどういう言葉を選ぶのか、というような話がちよいちよい顔を出す。そういう感じで、全体、例えば方法学の中の社会記号論やってる人いないから、僕はずっとやってるけど、ずっとここにいると全体との位置づけが分からなくなる。それを教育課程論なら課程論の中で、この辺とこの辺にくさびを打つとかっていう作業がいる。

以上のように Y 先生は、専門の研究を深めることで、逆に授業づくりから離れていくことを指摘している。Y 先生にとっては、自身の研究から一歩退いて、純粹にその科目の「授業づくり」をすることが、結果的に研究が深まることになり、自分のためになるのである。一見、自分の専門外の授業を担当することは無意味で大変なことのようにであるが、研究を深めるチャンスともなるのである。

#### 4. 小括

本報告では、実際に教職科目を担当する大学教員にインタビューすることで、授業と研究との結合の可能性について模索してきた。最後にこれまでのインタビューの流れを二点から整理し、全体を通して浮かび上がったことを述べ、小括としたい。

まず、Y 先生の狙う学生の「自己内対話」を促すためには、一方的な講義をするだけでなく、グループワークや発表の時間を作る必要があった。それは、単なる授業スキルともいえる。ただし重要なことは、それらを取り入れるだけでは十分とはいえ、学生の学びを保障するために適切に運用できるかどうかが鍵となるだろう。自身の設定した到達目標に向かう授業構想の中で、グループワークの時間がどのような価値を持つのか、吟味する必要があろう。

次に、授業と研究との関連は、その内容的な結合に留まらず、方法論的にも結びつきうることが示唆された。15 回分の授業を構想し実施することは、15 章分の論文を書くことと類似した活動である。さらにその広く学んだ知識が、自身の研究の裾野を拡げることにもなるのである。つまり、授業をすることが研究を深めることとなり、その授業が新たな研究のフィールドを与えることもありうる。このように考えると、授業をするときに研究が基盤となることは事実であるにしても、一方で授業が研究を深めるための重要なファクターともなりうるのである。

最後に、本報告全体を通した暫定的な結論を述べておきたい。「授業」と「研究」の結合や関連を問題化するとき、われわれは次のような議論の視点のみに陥りがちなのではないだろうか。すなわち、大学教員が行う授業は、まずその教員の研究内容がベースにあって、それを授業にどのように活かすべきか、という視点である。この視点からみると、研究を即活かせない授業は「単なる雑務」のようなものとなり、その乖離した授業と研究に頭を悩まされる結果となる。そのため、自身の研究を授業の中でどのように使うのか、という視点だけでなく、学生のためになる授業をするために、授業者にできることは何かを考える視点が必要であろう。授業と研究は一方向的な繋がりなのではなく、相方向的な関係なのであり、時として相互作用を生むものだからである。